



いのうえ あきこ
【合同資源みらい賞】 井上 昭子

お母さんが教えてくれた

お母さん、正月も終わり、春が近づいて来ました。あの長生村のお母さんの実家から帰り道に休憩した神社は、今も健在ですよ。

リヤカーに妹を乗せ、後押しをした私は7歳でした。

お母さんは嫁いだ家に帰りたくなかったのですね。寒い夕暮れでした。

あれは、お父さんが亡くなった最初の正月の里帰りの時でした。

お母さんの嫁いだ私の生家は、稀に見る極貧の家でした。戦死者を2人も出し、お父さんは戦後すぐに戦病死しました。文字通り戦没者墓誌名に3人が連なる家で、だから農業をする働き手もなく、質素に切り詰めた生活でした。そのやりくりは、いかばかりだったかと。

その上、お父さんのいない家で舅姑に仕えたお母さんの孤独を思う時、どんなにか寂しかったことでしょうか。

でも「あんた達がいたから頑張れた。」と口癖でした。

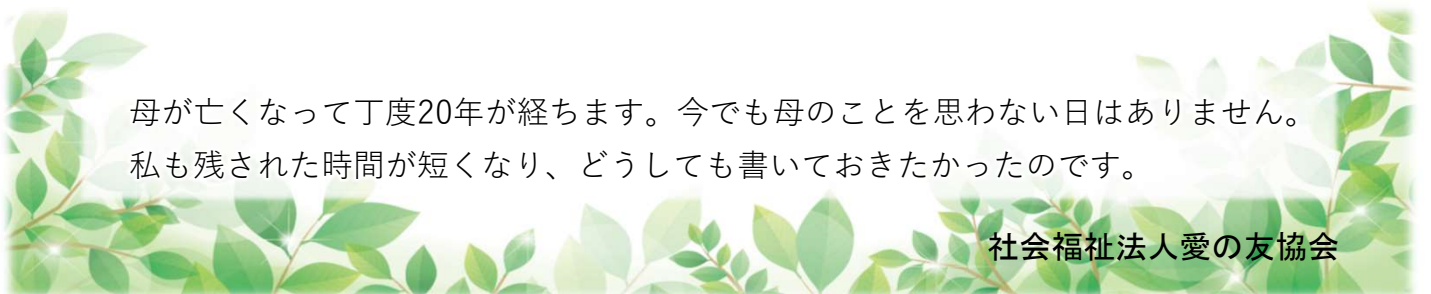
私が高校進学の時、親戚中から「貧乏人の娘は進学するな！」って言われたのに、「高校くらいは行かせる。」って頑張ってくれて、その上の進学の時も「あんたの好きにするがいい。私みたいな人生はもう沢山だ。」と応援してくれました。

お母さんが逝って20年が経ち、お母さんが教えてくれた「忍耐」や「信じて待つ」を思い出します。

生きている時には感謝の言葉も出なくて、今の地位があるのは、当たり前だと思っていた傲慢な自分が、恥ずかしい。

私は看護師として自立した生活ができ、今も仕事があるのは、あの時のお母さんの教えのお陰です。

(千葉県/72歳/女性/看護師)



母が亡くなって丁度20年が経ちます。今でも母のことを思わない日はありません。私も残された時間が短くなり、どうしても書いておきたかったのです。